あとがき…3年連続企画を終えて

プティ ヴィラージュ 施設長　西川 富美子

特集では3年間にわたって「愛着」をテーマに、シリーズで紹介をしてきました。

児童福祉に長年関わってきた1人として、なぜ、「愛着」にこだわったのか。それは、私が人と関わる福祉の仕事に携わった20代前半にほんやりではありますが、「人の営み」とは何なのだろうといった疑問からでした。

福祉の仕事のスタートは、重度の障害の子どもたちとの出会いでした。子どもたちは医療的ケアが中心の生活で、個々の意思に関係ない日課の中で、ケアしやすいように一括管理の下日々を過ごしていました。そこでは、重度の障害ゆえに身体的にも知的にも言語面においても、その子どもの障害だけに注目するのでなく、障害も含めて相手を知る、理解しようとする姿勢が最も求められたことでした。お互いが分からない関係で付き合っていると、緊張も強く誤解を生みやすく、日々のケアやリハビリにも直接的に影響として表れていました。しかし、障害が重くどのような状態であっても個々の意思はあり、「私とあなた」の関係は家族以外でも良好に築いていけるという体験を得ることができました。そこには、してあげているのではなく、一緒にやっている感覚や目的としていることも明確であったことから、回復が厳しい状況下であっても今必要なことは、これからも生きていくことにつながっているということでした。

児童養護施設では、入所してくる子どもたちに共通しているのは、入所以前に家庭生活を当たり前に過ごせなかったことです。その体験は多くの子どもが抱える、人としての関係性を築いていく土台が安定していないことです。施設は子どもの養育を職員が親や家族に代わって担います。担うということは、子どもの命を守るという意識を持ち、職員と子どもといった関係だけでなく、「人と人」という関係性を大切に育んでいくことです。施設の役割や養育の意味を、今一度、原点に返ってみる必要があると考えます。

3回のシリーズを通して各分野の方々が述べている内容を整理しますと、共通していたことは、子どもが生活している所が、安心で安全な環境のもと安定した人との関係性が維持できているか、ということでした。

代わって担うという意味は、環境を整え最も子どもと職員が信頼関係を築ける生活を日々営んでいくことであると理解できます。家庭には家庭の文化があるように、施設も養育の文化があるのだと思います。そして、担うことは言い換えれば、「覚悟」があるのかを問われているのだと考えます。人は育てられたようにしかつなげていけないのですが、でも、関わる私たち大人が恐れずに向き合って、一緒に成長していこうとする真摯な姿勢を見せることで、継続の意味や結果が生まれてくるのだと考えます。

私たちの関わりは、出会った子どもたちの人生に何らかの影響を与えます。それは、今後の子どもたちの歩みにも表われることです。私たちは知識や経験だけに頼ることなく、子どもを守り子どもは守られる体験を通して、人として育ち巣立っていってほしいのです。職員は子どもの一番身近な大人としてのモデルですが、お互いに支え合う人であることを忘れないように、安心できる環境を整えるためにも、職員間の信頼関係を築いていく努力も同時に惜しんではいけないのです。

何においても、「安心、安全、安定」が原則で、そこが揺らがないよう、それがなくしてお互いの関係性は築けない。このことを、3年に渡るシリーズから学んだことであると同時に、施設養育のあり方では新たな課題も見えてきたことから、今後の取り組みとしていきたい。

3年間にわたり、多くの関係機関や専門家の方々のご協力のもと、特集として紹介させていただけたことに感謝申し上げます。